

西来寺報

残暑厳しき折でございますが、皆様がいかにお過ごしでしょうか。

さて、今回寺報の第2回目ですが、今回は私（住職）の病気に ついて触れさせていただきました。 思えば病氣療養中にはつくづく健康であることのありがたさを感じた次第です。

しかしながら仏教では人が生まれてきた以上必ず引き受けなければならぬ「生老病死」という四苦を説いています。

「生」とは生まれて生きてゆく苦しみ、「老」とは年をとって体が思うように動かなくなる、そういう身を生きていかなければならぬ苦しみ、「病」今どんなに健康な人にも起こる病氣の苦しみ、「死」とは生まれた以上必ずやってくる死ななければならぬ苦しみ、この四つの苦しみを四苦といひ、このほかに「愛別離苦」（愛するものと分かれなければならない苦しみ）「怨憎会苦」（憎むものと会う苦しみ）「求不得苦」（求めて得られない苦しみ）「五

陰盛苦」（身心環境一切を形成する五要素（五陰）が執着されていることから起こる苦しみ）の四つ

があり、この後の四つの「苦」を前の四苦と併せて八苦となります。よく言う四苦八苦とはこれが語源となっております。

ところで、現代ではこの「四苦」を感じる感覚が薄くなったように思います。「老苦」と言えば今はお年を召しても昔のように腰の深く曲がったお年寄りも少なくなりました。またテレビなどではアンチエイジングとして様々な化粧品や健康補助食品が売られています。また「病苦」と言えば医療の発達により多くの病氣が克服されつつあります。一昔前なら重病で死に至る病もありました。「死苦」についても平均寿命も年々伸びています。また命つきて亡くなったとて亡くなり、そのまま納棺して葬儀社さんの斎場で葬儀を済ませて、近所の人がいつの間にかあの方はいなくなったと思わせられることも少なくないでしょう。

つまり、現代社会では「老病死」

ということが実感として感じるこゝとが薄れているのではないのでしょうか。理屈としては、頭では分かっているつもりでも実感としてはつかみづらい、普段あまり考えたくないのが実際のところだと思いません。

かくいう私も健康で当たり前前と 思っていました。しかし、昨年病 氣を患ったときにある僧侶の人か ら「健康が当たり前ではなくて病 氣が当たり前なんですよ。」とい われ、「ああそうだった、病氣に なる身を生きていたんだ。」とい うことに改めて気づかされました。

「生老病死」という四苦を考え ていくことはいやなことですが、 人間の事実としてお釈迦様の昔か ら今に至るまで変わることにはあ りません。むしろこのことが私の人 生を考えさせられる深い縁となっ てくれるものではないでしょうか。

普段、忙しい日常生活に埋没し て、意識にもものぼらない、考えも しない四苦ということが、改めて これでもいいのだろうかとか疑問を投 げかけて私たちの心の奥にある宗 教心というものに目覚ましむるきつ かけになるものと考えております。 大変、重苦しい話になってしま いましたが、「どうせ死ぬんだ」

ではなくて、いただいた命を生き、 どう全うしていくのか、仏教では このことを教えているのではない でしょうか。私も皆さんと教えを 頂いていこうと思えます。 合掌

文 住職

境内の百日紅の花



また今年も境内の百日紅さるすべりの花が咲きました。山門をくぐって右手にある樹齢およそ200年の古木です。老木にもかかわらず頑張って花を付けています。

（八月二十八日撮影）

【門徒Q&A】

Q 「門徒」ってなに？ 誰のこと？ 「檀家」とは違うの？

A これを読んでいるあなた、つまり真宗門徒のことです。

「門下生」や「同門」などの言葉があるように、もともと仏教の各宗派でも、一門の徒輩という意味で使われていました。

一方「檀家」とは、梵(ぼん)語のダーナパティという言葉から生まれたもので、元の意味は、布施をする人のことです。その人たちの所属する寺院を檀那寺と呼び、檀家が自発的・世襲的に寺院を維持していく形が、歴史の中でつくられてきました。

しかし、江戸時代に、いわゆる檀家制度が幕府の政策として取り入れられたことで、「檀家」という言葉が徐々に定着していききました。檀家制度には戸籍をはつきりさせ社会制度を近代化するという利点があった反面、身分制度を助長し、当時の庶民から、職業選択や転居、結婚などの自由を奪ってしまったという暗い側面があったことも事実です。

現代では《家の仏教》として「檀家」という言葉がすっかり定

着してしまった感がありますが、本来宗教は《個》のものであるはずです。

現在、他宗では《個》を指す場合、信者という言葉がよく使われているようですが、一人一人の信心、つまり《個》を最も重要なものと位置づけてきた真宗では、開宗以来「門徒」という言葉を使い続けてきました。

したがって、今「門徒」と言えば「真宗門徒」のことを指すようになり、「門徒もの知らず」などという言葉(これについては、また改めて取り上げます。)も生まれてきました。

宗祖親鸞聖人は『阿弥陀如来の前では万人は平等であり、皆、仏弟子の一人だ。私には一人の弟子もない。』とおっしゃり、慕って集まって来られる人々を、仲間としての敬意をこめ「御同朋」(おんどうぼう)や「御同行」(おんどうぎょう)と呼ばれました。真宗ではこれらの言葉も、今に生き続けています。

「檀家Ⅱ家の仏教」から本来の姿である「門徒Ⅱ個の真宗」として、真宗の教えを生活の中に生かしていただきたいと願い、今号からQ&Aのコーナーを連載してま

いります。「今さら訊けないこと」「日頃から疑問に思っていたこと」「こういう時はどうすればいいの」「どうぞ様々なご質問・ご要望をお寄せください。」

秋彼岸法要のご案内

九月二十三日

(彼岸中日・秋分の日)

午前の部：午前十一時より
午後の部：午後二時より

・御懇志の受付は、本堂で致します。

・法要ご出席の方は、なるべく過去帳または法名軸をご持参ください。

・ご都合やご事情により、法要に出席できない方には、申し経(過去帳等をあらかじめお預かりし、法要の際にご本尊に奉獻)をお受けしますので、ご希望の方はお申し出ください。

【年忌のご案内】

当西来寺では、かねてより皆様からご要望のありました、年忌法要のご案内を、今年六月から郵送させていただきます。

年忌法要該当の年に、ご命日の約三ヶ月前をめどに、お知らせ申し上げます。
法要をなさる方は、特に土曜、日曜、祝日はご希望が集中致しますので、できるだけお早めにご連絡ください。

尚、発送前に十分注意を致しますが、すでにご法事のお申し込みをいただいた方、あるいは併修等により、すでに法要を済ませた方にご案内が届きました場合には、ご容赦いただきたく、何卒、宜しくお願い申し上げます。

・彼岸経

ふらつく足もと 曼珠沙華

・たまさかに

落つる木の葉を浮かべつつ
秋を青ずむ 池のひそけさ

釋甫圓(前住職)

○ 皆様の投稿もお待ちしております。